



邑楽の夢づくり 今、職人の手で

建設業界で働く、いわゆる「ガテン系」の職人に、皆さんはどのようなイメージをお持ちだろうか。建設職人と一口に言っても、仕事の内容は多岐にわたる。例えば、建物の室内を仕上げる内装屋、建築現場で作業をする土木職人、土地の位置や形状を正確に測る測量士など、私たちが快適に暮らせるための手助けをしてくれている。

町は今、中央公民館建設事業を進めている。
中央公民館が完成するまで、現場での力仕事や、重機の操縦を続ける職人たち。
天候状況が悪化しても関係なく仕事を続ける。真夏の暑さは容赦なくその身に降りかかる。
しかし、どんなに過酷な状況でも中央公民館建設工事を進める職人たち。その現場に広報おうらがいった。

役 場の西側で進む中央公民館建設工事の現場に入ったのは、8月9日のこと。ホールの三角屋根の形をイメージできるまでになっていた。建物を造る作業を行うために使う「足場」が建物全体を覆う。「足場」は建物が出来上がるにしたがって跡形もなくなってしまう。それでも現工程の主役を担う縁の下の力持ちだ。何千本という鉄のパイプがすき間なく内部まで続く。まるで要塞のようだ。この中で一本一本の釘を打ち、ねじを締めては緩め、大胆かつ精密な作業を己の手で行なっているのが職人たちだ。

職 人は皆、真っ黒に日焼けし、安全面から作業着は長袖長ズボンにヘルメットのフル装備。電動ドリルやペンチ、スパナ、ハンマーなど、道具を入れた腰袋は重い人で10キロ近くあるという。作業の過酷さがひしひしと伝わってくる。特に真夏は照りつける直射日光を浴びながら作業を続ける。だから、体力の消耗も激しい。もちろん、職人の体調を考慮した休憩が小刻みに取られているが、やはり体にはこたえるのだろう。休憩のたびに現場の自動販売機には職人が並ぶ。上から太陽、周りは鉄の要塞。そしてこはあの館林市の隣だ。何をしたら暑く、きつい。

職 人。とりわけ土木作業員の仕事は、きつい、汚い、危険の3Kだと聞く。「気の緩みは事故のもと。間違えば命を落としか

汗にまみれる。ザ。現場職人

ねない」。現場代理人が話す表情は真剣だ。金属音や機械音に混じって聞こえる怒鳴り声にも似た声。職人たちのそんな声の掛け合いは、安全確認の徹底を意味するのだろう。さらに現場代理人が続ける。「多い日で60人近い職人が日替わりで現場に入る。初対面同士で作業することも少なくない。コミュニケーションを取りながら作業を続けるのは、同じ現場で働く仲間を事故から守るため」。

重 い物でも軽々と持ち上げ、高い場所でも余裕で作業する少しこわもてな職人たち。茶髪が少し混じった職人に声を掛けると「仕事のやりがいは何と言っても、やった成果がカタチに残ることですね」と笑った。職人が行う仕事は地図に残る仕事だ。自分がつくったものが残っているとと思うとやりがいを感じるという。

さ まざまな危険と隣り合わせで、常に個人の専門的な技術を求められる職人たち。その心の奥底には仲間への思いやりと仕事への責任感が秘められていた。この現場で働く人たちの仕事にける熱意と作業する背中と汗の匂いが「ザ・現場職人」を感じさせてくれた。そして、職人たちの眼差しには、中央公民館建設に賭ける「働くかっこよさ」がある。暑さに耐えながら、邑楽の夢づくりを進める職人たちの姿に心打たれた。この日、役場前の温度計は42度を表示していた。

中央公民館の建設日誌

連載—第5回—



平成30年4月末に工事を終了。そして備品整備や機材調整などを経て、同年9月オープンを目指す。